

第十四表
三原山有感震動
順次ノ時刻(午後)

(噴孔壁北西側ノ懸崖上ニ於テ觀察ス)
明治四十五年四月十二日

時	分	秒	時	分	秒
2	31	22	2	33	31
		27			36
		31			41
		41			55
		(此ノ間缺測)			05
	32	18		34	10
		50			14
		00			20
		05			26
		12			37
		17			44
		22			50
		26			

第五章 第一期噴火殘餘活動

二五 明治四十五年七月末ノ變動 明治四十五年七月二十七日ヨリ噴火活動アリ、夜ハ山上ノ空ニ赤ク映ジタリ、二十八日ハ「ゴート」音響最モ甚シク、夜ニ入りテハ元村ニテモ聞クヲ得タリ二十九日夜九時頃登山セルモノ、談ニヨルニ火口ヨリ連續シテ花火ノ如ク鎔岩ヲ吹キ上ゲ、噴孔壁頂迄達セルコトモアリシト云フ。又清水元村村長ノ談ニ孔内十個所ニ小火口ヲ生ジ鎔岩ヲ噴出セリト、而シテ震動ハ破裂ノ當時噴孔壁斷崖上ニ靜坐シテ注意スレバ幾分カ感シ得ル程度ナリシト云フ。余ガ八月十五日ニ見タル所ニヨレバ川尻ト相對スル孔壁南側ノ中途ヨリ少シク白煙ヲ吹キ出ダスハ從前ト同ジ

ナリキ、又新岩層丘群ヨリハ線香ノ如クニ白煙ヲ吹キ居レリ、本年四月五月孔底ニ流出セル舊鎔岩ハ多クハ煤色ニ變ジタルガ、今回新タニ流出セル分ハ黒鉛ノ如キ光輝ヲ放テリ、其ノ上ヲ歩行セルニ熱サヲ感シ所々ノ裂罅ヨリ下層ガ赤熱ナルヲ見タリ、明治四十五年七月二十七、八日ノ噴孔底變動ノ結果トシテ孔壁根本ニ沿ヒ一種ノ段階ヲ生ジタルガ其面ノ幅ハ川尻下及ビ「ナウマン」丘ノ附近ニ於テ最モ廣ク約百米ニ達セリ、蓋シ噴孔壁根本ノ傾斜側ト蛤山半缺山ノ如キ元來ノ突起アリシ個所ハ、支持ヲ與フル爲、鎔岩層ガ著ルシク低落スルヲ妨ゲラル、モノナルベシ、段階面ノ最狹ナル所ハ約二十米ノ幅トナレリ。孔底陷落區域ノ北側境界ハ概略「ナウマン」丘ノ中央ヨリ新成岩層丘群ヲ過ギテ牡丹餅岩ノ方向ニ當ル一線ナリ。此レヨリ南西方、即チ新岩層丘ノ南東方ハ深ク陷落シテ倒圓錐形ヲナシ、其ノ最深點ト鎔岩層面(陷落セザル段階)トノ高距ハ約三十五米ナリキ。要スルニ、前記セル如ク、第一期噴火作用ハ是レヨリ先キ既ニ靜穩ニ歸シ、赤熱鎔岩ノ噴出ハ全ク止ミタリシガ、噴火力ノ衰減ト共ニ一時上騰セル孔底ノ鎔岩層ハ自己ノ重量ニテ漸次下壓セラレタルモノト見エ、遂ニ七月二十七日ヨリ二十九日迄三日間ニ亘リテ既ニ凝固セル孔底ノ鎔岩層ハ周邊ノ圈

狀部ヲ殘シテ、全部俄然九十餘尺ノ陷落ヲ受ケタリ、爲メニ壓迫セラレタル下層ノ鎔岩ハ、許多ノ裂罅小噴口ヨリ再ビ赤熱ノ鎔岩ヲ噴出スルノ美觀ヲ呈シ、新ニ鎔岩ヲモ流出シタルガ三日間ニシテ活動ヲ止メタリ、此ノ變動ノ結果トシテ第一期ノ新成岩層丘ハ破壊セラレ、高サ約六十五尺ヲ減ズルニ至レリ。

今回ノ噴火前ニ嘗テ中村博士ガ大島火孔ヲ調査セラレタル際ニ孔壁ノ下部ニ於テ一種ノ狹長ナル棧様ノ段階(第四圖)ガ存在スルヲ認メラレタリ、又平林理學士ハ富士山ノ地質調査ニ際シ、伊木理學士ハ阿蘇山ノ地質調査ニ際シテ、孔内ニ一種ノ臺地(テレース)アルヲ認メラレ、何レモ曾テ鎔岩層ガ陷落セルニ起因スベシトセラレシガ今回ハ實際ニ此ノ奇有ナル現象ヲ調査スルヲ得タルモノトス。蓋シ淺間山大噴火後ニ其ノ孔底ニ見ルヲ得ベキ鎔岩面ノ輪狀波モ原因ヲ等フシ、強キ爆發ノ爲メニ一時隆起セシメラレタル孔底鎔岩ガ次第ニ陷下セル爲メニ中央點ヨリ始メテ順次ニ圈ヲ生成スルモノナルベシ(本會歐文紀要第七卷第一號第一圖ヲ見ヨ)。

二六 岩層丘ノ高サニ就キテ、三原噴火ノ如キ非爆發的破裂ニ際シテハ鎔岩ノ流出ハ内部ノ壓力ヲ減少シ以テ衰弱セシムルノ順序トナルベシ、而シテ鎔岩ノ流出モ噴火力衰弱モ共ニ

噴孔底鎔岩層ノ陷落ヲ促進スルノ原因トナルベキナリ。又此ノ如キ性質ノ破裂ニ於テハ、新ニ生成セル岩層丘ノ重量ガ下ヨリ岩漿ヲ噴出セントスル張力ト粗ボ平衡スベキヲ以テ、新岩層丘ノ高サニハ多少一定ノ限度アルベク、岩層丘ガ充分ノ大サニ達スレバ更ニ附近ノ個所ヨリ別ニ口ヲ求メテ岩漿ノ抛射ヲ始ムベキナリ。

第六章 大正元年九月十月

第二期ノ噴火

二七 第二期噴火ノ始メ、明治四十五年七月二十七日乃至二十九日ニ三原火孔底ニ充テル第一期ノ鎔岩層ガ俄然陷落シタル後ハ再ビ全ク靜穩トナリシニ同年(大正元年)九月十六日夕ヨリ更ニ噴火ヲ開始シテ第二期ノ活動期ニ入りタリ、今ヨリ百三十六年前ナル安永六年ノ大噴火ハ八月二十二日ヨリ始マリ十一月末迄活動セシ後一時次第ニ鎮靜シ、翌年四月二十七日ニ至リ更ニ第二期ノ噴火ヲ始メタリ、其ノ時差ハ約八箇月ニ當ル、而シテ今回噴火ノ第一期ト第二期トノ時差ハ約六箇月半ニシテ安永年間ノ場合ト相似タルモノト思ハル。

二八 噴火ノ概況、第二期ノ噴孔ハ第一期ノ分ト共ニ明治九年十年噴火ノ結果タル「ナウマン」岩層丘ニ近接セル位置ニア